

令和7年度第2回 福岡市環境審議会脱炭素社会推進部会 議事録（要旨）

日時：令和7年11月13日（木）14時00分～16時00分

場所：TKP ガーデンシティ PREMIUM 天神スカイホール ウェストルーム

（※現地会場とオンラインを併用したハイブリッド形式で開催）

1. 開会

開会の挨拶（福岡市環境局長）

2. 協議事項

脱炭素戦略2040（次期「福岡市地球温暖化対策実行計画」及び「福岡市地球温暖化対策率先実行計画」）の骨子案について

各委員から出された意見等と質問に対する事務局からの回答は以下のとおり。

○部会長

ご意見、質問などをお聞きしたい。

○委員

カーボンニュートラル、サーキュラーエコノミーのほかネイチャーポジティブ（自然資本）の取組みも重要な視点であり、こうした視点を将来像などに示していったほうがよい。

○事務局

3分野は密接に関連し一体で取り組んでいく必要があるものであるため、今後の検討の中で、記載ぶりを検討していきたい。

○部会長

2040年度目標については、現状国よりも市が削減を進めているため、より野心的な目標を掲げて、市民にメッセージを出すことは重要なことだと考える。全国的に原発が稼働してきている地域もあり、従前、九州は電源のゼロエミッション化等が他の地域より進んでいるというアドバンテージもあったが、この目標を達成していくのは相当大変なことである。だからこそ、本日の説明であったような様々な対策を総動員し、かつ市民に働きかけていくことが大切だと考える。

○委員

自動車部門の削減が大きな課題ではないか。

○事務局

自動車部門は、約12万台の物流貨物車と約63万台の乗用車でそれぞれ排出量の半分を占めている。乗用車はハイブリットや一部EVの進展により排出量が逡減しているが、貨物

車は、特に中型、大型のEV、FCVのトラックのラインナップがごくわずかであり、削減が横ばいとなっている。国は、2040年、50年に向けての後半期でEV等の普及を進めていく方針でもあり、市としては、より早い普及を進めるため、充電器等インフラ整備などを早い段階で取り組んでいく必要がある。

○部会長

自動車は、メーカーの動向や大型の場合は技術革新によるところもあり、国としても政策に掲げている以上はしっかり後押しをする必要がある。

○部会長

福岡市の目指す姿(案)について、候補のうち、どの案が将来像として最適かご意見をいただきたい。

○委員

福岡市に住んでいる方々にといい意味では、「暮らし」という言葉が入っているものが分かりやすく、皆さんに親しんでいただける。一つ目の案である「カーボンニュートラルな暮らしを実現したアジアの環境先進都市」が良いと考える。

○委員

福岡市は全国に先駆けて、また国に先駆けて、2040年度実質ゼロを目指しており、環境に配慮した都市であることを市民や海外からの旅行者などにしっかりPRしてほしい。

○委員

将来像の案は「カーボンニュートラルな暮らしを実現したアジアの環境先進都市」と暮らしに直結する脱炭素という、市民、事業者にわかりやすいメッセージ案が良いと思った。

○部会長

脱炭素先行地域に選定されたことにより、取組みが見える化される地域ができたと考える。「イノベーションの社会実装」が目指す姿のキーワードにも入っているため、それが社会に見えて波及効果がでることが期待される。

○委員

再エネの推進の取組みは、排出削減に計上するものではないのか。

○事務局

再エネにより発電した自家消費部分は排出削減の要素となるが、気温変化等の要因で相殺され評価されづらい分野であることから、自治体が積極的に取り組んでいる成果を評価いただける方法として、再エネ電気の自家消費や市外への売電を行うことで、市外での化石燃料由来の発電の低減に貢献することとなるため、削減貢献の部分に計上していくものである。

○部会長

国目標でも、完全な排出ゼロは難しく、残る排出分をカーボンキャプチャーの新技术などの方策によりオフセットする方向でもあるので、福岡市は、再エネによる市外貢献や福

岡方式による海外貢献も含めて、福岡市の「実質ゼロ」に取り組むことをしっかりと説明して行ってほしい。

○部会長

再エネの導入は脱炭素において必須であるが、全国的にも山間部での設置は難しくなっているため、今後、ペロブスカイト太陽電池の技術革新が進み一般化すれば、建築物が集積している福岡市で建物の屋根や壁面などへの導入を進めることで、脱炭素に貢献していくのは重要な取組みと考える。

○委員

将来の絵姿では、ガスの脱炭素化として、メタネーションにより都市ガスの代替となる合成メタンが市内へ供給されるイメージを入れるとわかりやすいのではないか。

○事務局

原案に向けてより分かりやすくできればと思う。

○委員

全国で一番進んでいるペロブスカイト太陽電池の導入や防水材と一体となった製品の実証などをしっかり進めると同時に、同じ特性を持つカルコパイライト太陽電池との「タンデム型」の導入の検討であるとか、工場などから排出される CO₂ を吸収させた素材をセメントの代わりに混ぜ、道路工事やビルの建築の際に使用していく CO₂ 吸収コンクリートの削減効果を検証するなど、先端技術の導入に向けて、他都市に先駆けてしっかり頑張ってもらいたい。

○事務局

カルコパイライト太陽電池の原材料については、銅やチタン等を原料としており調達部分で難しい部分がある一方で、ペロブスカイト太陽電池とは発電する太陽光の波長が異なるため、両電池を組み合わせるタンデム型の太陽電池として高い発電効率を実現する研究が進められている。

CO₂ 吸収コンクリートは、CO₂ を吸収し精製される炭酸カルシウムがセメントの代替となるものであり、現在ゼネコンなどの複数の事業者が河川工事や道路工事で活用可能なレベルとして一部実装している。今後、技術革新が進めば建築分野や都市の再開発での活用も期待されるものでもあり、こうした脱炭素の先端技術の実装支援に力を入れていきたい。

○部会長

それでは、本日の議論はこれにて終了とする。本日の議論を踏まえたうえで、引き続き計画の検討を進めるものとする。

3. 閉会